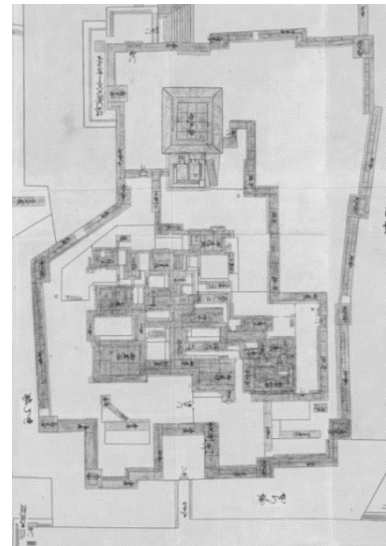


令和5年度 地域文化活性化助成 活動成果概要

団体名・個人名	岩間 香
活動名称	徳川大坂城 400 年 一本丸御殿室内空間復元プロジェクトと展覧会の開催
活動内容	徳川幕府が建造した大坂城の御殿は、幕末まで存在したが、その研究はほとんどない。そこで徳川大坂城の造営に関わった大工・瓦師・絵師の活動を「中井家文書」（大工）、「寺島家文書」（瓦師）、「撰営秘録」（絵師）などの図面や文書により分析し、その活動を明らかにする。また本丸御殿の復元設計、室内の障壁画の復元を通じ、細部を明らかにする。さらに、その成果を広く知ってもらうために模型を制作し、今昔館において展覧会を開催する。
活動のコンセプト・ねらい	大坂城は都市・大阪のシンボルとして大阪市民に親しまれている。しかしその本丸御殿が幕末まで存在したことは、あまり知られていない。また豊臣大坂城に比べ、徳川大坂城に対する市民の関心は高くない。徳川幕府による大坂城完成から約 400 年となるのを機に、城の代表的な建物であった本丸御殿について、平面や内部空間の詳細を明らかにする。他の城御殿と比較し大坂城の特色を明らかにする。その成果を模型など分かりやすい方法で公開し、市民の関心を喚起する。

活動実績	資料の収集 プロジェクトは徳川大坂城に関する資料に関する情報を収集し、調査することから始まった。大阪くらしの今昔館、大阪城天守閣、大阪市立中央図書館などで調査を行った結果、数点の図面類や資料を撮影することができた。中でも重要文化財「大工頭中井家資料」（中井家蔵、大阪市立住まいのミュージアム寄託）は、大坂城を造営した大工家に伝来した資料で、「大坂御城惣絵図」「御城中御殿向絵図」など、8 点の図面や資料を見出すことができた。 復元箇所の検討 本丸御殿には遠侍、大広間、広間、白書院、対面所、銅御殿、台所、その他多くの執務や控えの間が 66 室があり、建坪は 3600 余坪にのぼる。そこで復元箇所を絞ることにした。プロジェクトは岩間（申請者ー日本絵画史）、植松（協力者ー日本建築史）のほか、建築家（設計）、日本画家（下絵制作）、模型製作者、デザイナー、今昔館（建築史）が参加して意見
------	---



「大坂御城惣絵図」

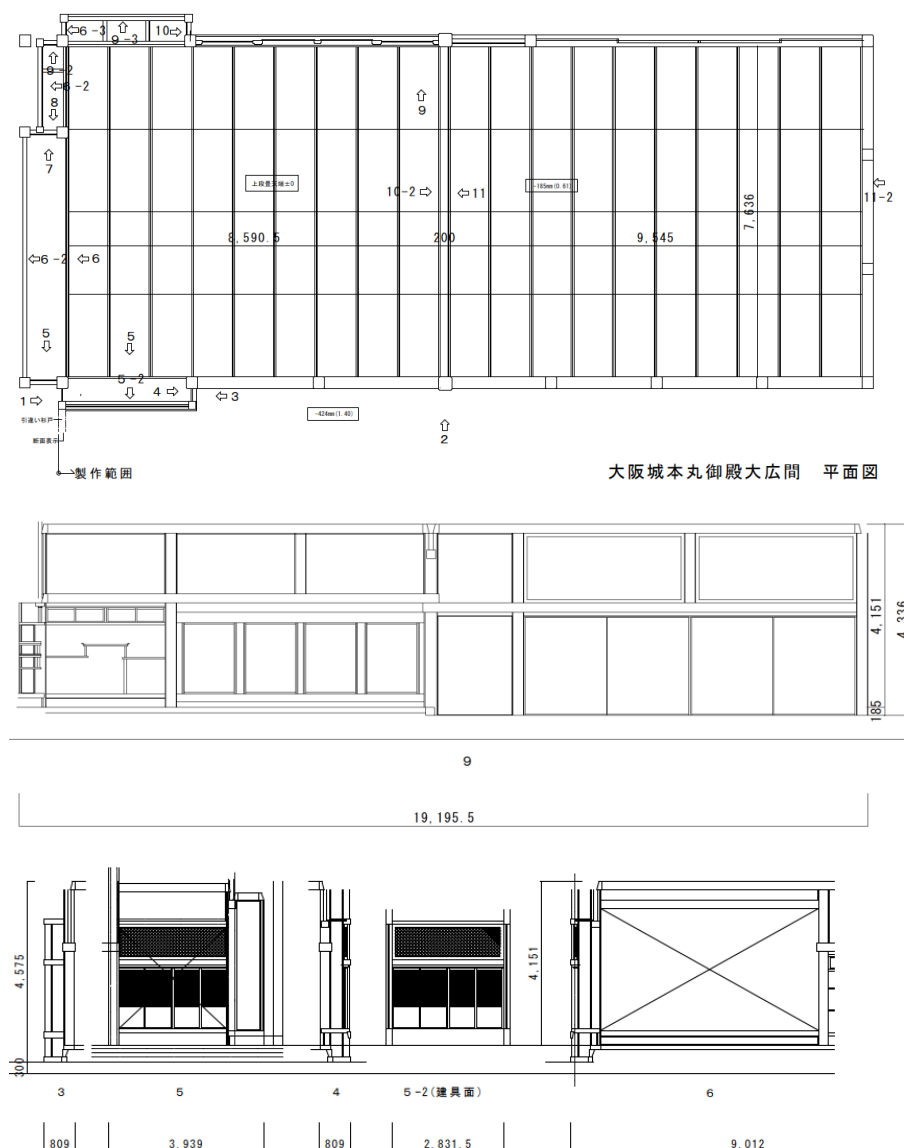
交換しながら進めた。その結果、内部の障壁画を復元する建物として、対面などの儀式が行われるハレの場であった大広間を復元することとした。

2015年に制作した模型の縮尺は50分の1の大きさと、襖の高さは約3.6cmほどであった。この大きさでは図柄の細部を再現できないため、今回の模型は10分の1とした。この大きさでは違い棚の天袋の絵まで再現が可能である。

模型として制作するのは、大広間の2室（上段と下段）を再現し、建築では室内の2面（北と東）を復元設計して、床・棚、書院、帳台構、襖、欄間等を再現する。襖と貼付壁の絵様を文献資料と既存の絵画から再現することとした。

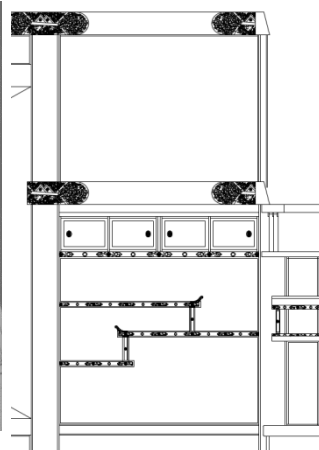
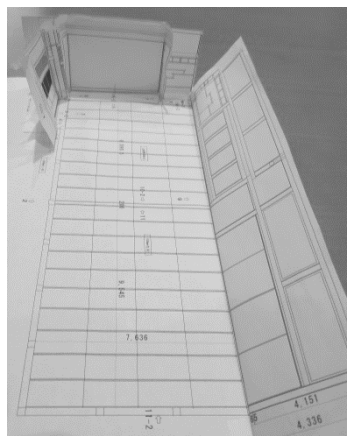
建築設計図の制作

模型の制作には実際の建築に準ずる正確な図面が必要である。「中井家資料」および「大坂城内旧御殿写」（大阪城天守閣蔵）から平面と立面の概要をつかみ、建築の規式に従い詳細な寸法を決定していった。その結果、2023年8月には再現部の平面と立面が完成した。



紙模型による検討

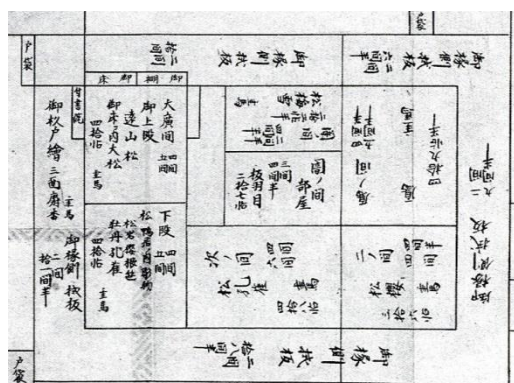
設計図が確定してからは、立体を組むことができるようになり、模型の見え方や背面の処理についても検討した。その結果、上段の復元箇所を北面と東面だけでなく、西面の付書院も含めることに変更した。付書院上部の細工などは二条城



を参照した。さらに釘隠し・金物・襖の引手などの細部についても検討し、金物については名古屋城の御殿の金物を参照してデザインした。

障壁画の画題

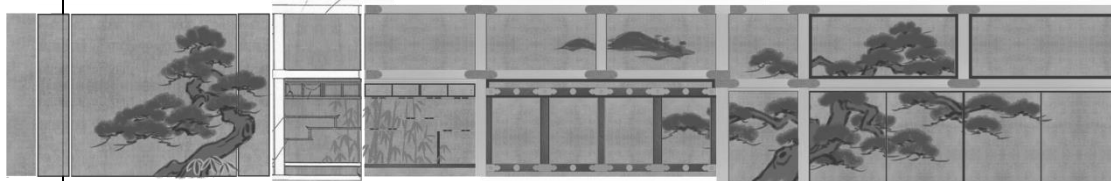
徳川大坂城を預かる城代は城外に屋敷があり、本丸御殿は幕末まで使用されなかった。警固にあたる定番、大番、加番は旗本や大名から選ばれ、任期は1年であった。彼らは任期中に御殿内を見学することが許された。見学は一大イベントであったため、順路、見所、画家などを記した「案内」や「見学記」が複数作られた。しかしそれらの文章は絵画の知識に乏しい素人によるため、内容に精粗や異動が見られる。そこで今回江戸時代の記録6種類と、4種類の図面のコピーを収集し、それらを比較・考察して画題を決定していた。



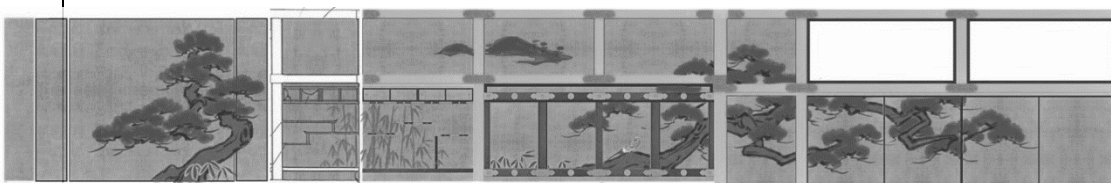
「大坂御城中御殿向絵図」（中井家資）

下絵の制作

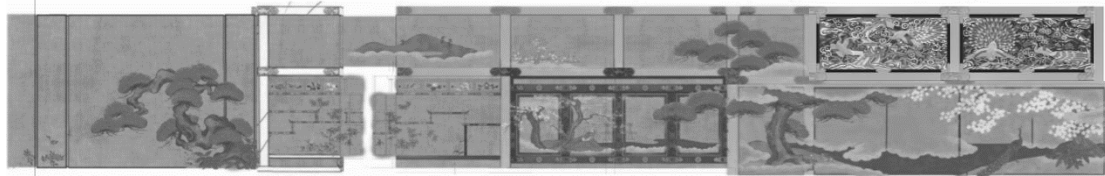
つぎに障壁画下絵を描く画家に図面、画題、参考図などを付して描いてもらった。画家はパソコンで作業し、送られてきたものに対してコメントを付して修正してもらった。



初期の下絵。画家は右上の欄間部分を小壁と誤っている。



欄間部分を修正。それにともない大松の形状を変化させている。

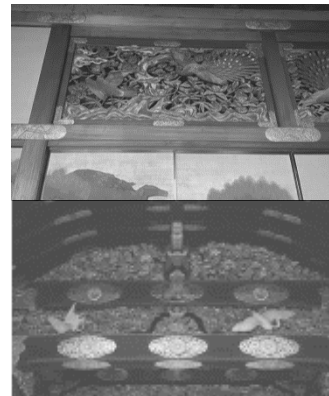


全体に尚信の画風に寄せる。記録に従い、水流、土坡、根笹、花などを加える。

障壁画と並行して部材の材質や色味などについても検討した。現在の二条城では造営から 400 年がたちあち、柱などは黒に近く見える。しかしこの模型では造営からあまり時間の経過していない時を設定し、当初の素木の色を再現した。また金箔地は箔足がやや見えるようにした。さらに金砂子や金泥の霞引きなどを加えることにより、金雲に立体感や奥行きを表すことができるようになった。框や長押などの部材は江戸時代の記録に従い色を再現した。記録の無い物については二条城に準じて決定した。

欄間の再現

欄間は最も色の再現が難しい箇所であった。制作時には極彩色であったが、400 年の間に退色が進み、多くのほこりがつもっている。おりから修復まもない二条城の唐門や、神社仏閣の欄間などを参考に色の調整を図った。



二条城の实地調査

作業が細部の形状や部材の確認が必要となり、プロジェクトメンバーで二条城二の丸御殿の实地調査に赴いた。二条城は徳川大坂城と同時期に、同じ大工・絵師により造営された城御殿である。画題は大坂城と共通するものが多く、同じ下絵を使って描いたことも予想された。特別観覧の申請をしたので、普段は立ち入ることのできない室内で、撮影をすることができた。その結果、写真集などでは紹介されない細部や、見えない箇所の撮影をすることができた。とくに障壁画では部屋の凹凸を巧みに利用し、奥行きや立体感を演出していることを体感することができた。上段下段の床高による見え方の違いも理解することができ、实地調査はおおいに有効であった。

事業の成果・効果

研究論文として岩間は「徳川大坂城の障壁画」（『徳川大坂城をさぐる』清文堂、2023）を執筆し、大坂城本丸御殿の主な建物の障壁画について分析した。また共同研究者の植松は「京都瓦師触頭寺嶋家配下の「組」の変遷について」（『大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）研究紀要・館報』21、2023）を執筆し、徳川大坂城の瓦を制作した寺島家の一族の京都における組織について明らかにした。

また徳川大坂城の本丸御殿に関する記録類・図面類を複写し分析した。また同時期に同じ大工・絵師で制作された二条城二の丸御殿を实地調査した。その結果、床、違い棚、付書院、帳台構えなどの木材・仕様について、詳細な資料を得ることができた。また障壁画については部屋立体の細部の文献を補佐する多くの資料を得た。

その結果、資料や記録類に基づき、信頼性の高い模型を製作する準備が整った。

今後の展開	銅御殿の復元 2023年度の研究活動により、最高の格式の建物は銅御殿であることが判明した。そこで2024年度は銅御殿の復元を行い模型を製作する。芳泉文化財団の2024年度助成金を申請し採択された。大広間と同縮尺の1/10の模型に再現し、比較検討する。 展覧会の開催 2025年2月から4月にかけて、大阪市立住まいのミュージアムにおいて「徳川大坂城展」を開催する。展示物として大広間と銅御殿の模型、同ミュージアムの所蔵品、「中井家資料」などの寄託品のほか、他博物館から文書や絵図を借用し充実を図る。会期中に講演会やミュージアムトークを行い、市民に徳川大坂城を分かりやすく解説する。 復元記録の公開 復元の根拠や模型製作の過程は、展覧会で展示するとともに、参考にした画図・写真を含めて公開する。
--------------	---

設計



絵図・記録・写真を読み解き図面を作成する

二条城で実地調査



模型で復元する大広間の松の画法や配置などを記録。下座からの視覚効果を確認した。



大坂城の大広間を担当した狩野尚信は二条城では黒書院を担当。黒書院も調査した。



薔薇・熊笹の葉脈は金泥で描かれている。



金物の細部、縁の錦の幅などを確認。



壁の凹凸を巧みに用いて奥行や立体感を表す

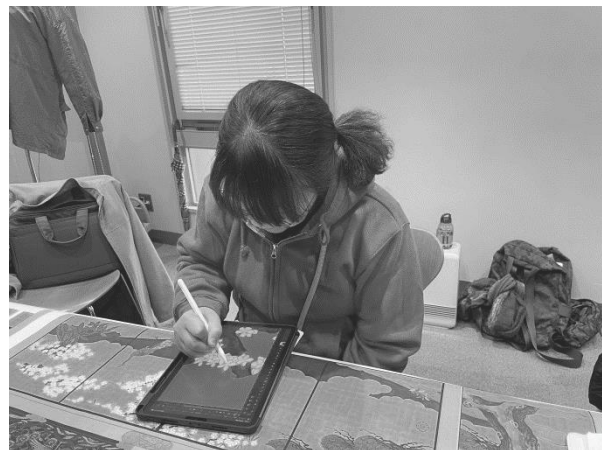


将軍座からのみ見える絵もあった。

原寸大に印刷

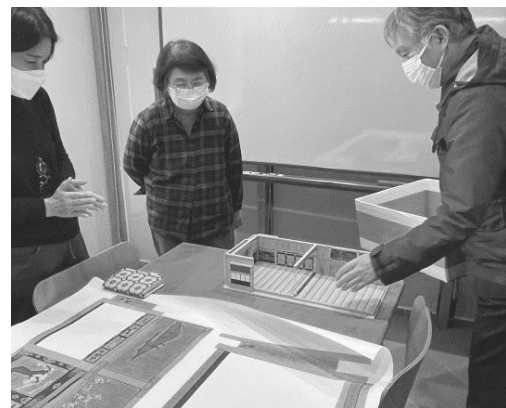


モチーフの描きこみや配置を確認。



画家は指示を受けてその場で修正していく。

雛型を製作



床の高さ、部屋の外側、再現範囲などを決め、印刷と組み立てを残すだけになる。